琉球大学学術リポジトリ

西部劇映画の外国人監督たち（レオーネ研究ノート）西森　和広

メタデータ	言語:
	出版者:
	琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム
	公開日: 2018-12-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西森, 和広
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43069

言語文化研究紀要　*SCRIPSIMUS*　No.27, 2018

西部劇映画の外国人監督たち（レオーネ研究ノート）

西森　和広

初めに

ハリウッドは多くの外来の才能を受け入れきた。チャップリンやヒッチコックはイギリス人だが、英語系諸国以外からでも、フリッツ・ラング（ドイツ）、ジャン・ルノワール（フランス）、フランク・キャプラ（イタリア）、ウィリアム・ワイラー（スイス）、ビリー・ワイルダー（オーストリア）などの巨匠の名がすぐに思い起こされる。少し前の時代の名ばかり挙げたが、事情は今でも同じだろう。彼らがアメリカに渡って来た理由は様々だ。単身または家族と共に新天地を求めて来た者、職業人として招かれた者、そしてある時代に集中して多いのが戦火やナチスから逃れて来た者たちだ。今回取り上げる映画監督たちの履歴を見ると、この最後の例の多いのに気付かされよう。この事実は西部劇映画の盛期との関わりが推量される。『BFI西部劇の友』によると、アメリカで製作された長篇映画全作品に占める西部劇の比率は、サイレント期から平均して20％を幾らか切るほどでったのが、1935年に28％に達して以降25％前後を堅持する。衰退の兆しは前年に記録した31％から23％と大きく下げた57年にすでに認められ、以後は下げ基調に入り、60年以降は20％に達することはなくなる（*TheBFI Companion to the Western*, p.427）。30年代半ばから50年代末頃まで、これが西部劇全盛の時代と言えよう。第二次世界大戦とその前後の時代と重なることが分かる。

ところで「優れてアメリカ的な映画」（アンドレ・バザン）である西部劇において、外国人監督というのはどういう存在なのだろう。セルジオ・レオーネをはじめとするイタリア製西部劇への多くの批判は、要約すれば「西部を知らない」ということに尽きるようだ。しかし海の男を目指していたジョン・フォードが初めてハリウッドにやって来た時、どれだけ「西部」を知っていただろう。外国生まれの映画人はどれほど西部劇に関わってきたのだろう。もし彼らの貢献が小さくなかったとすれば、西部劇が西部劇であるという“authenticity”はどこに求められるのだろう。今回は、アメリカ以外で生を受け、西部劇作品の監督を務めた者たちを中心に、そのリスト作りを行い、今

後の議論の基礎作りとしたい。なお各監督の伝記的記述についてはできるだけ『ブリタニカ百科事典（インターネット版）』に拠ったが、必要に応じて最後の参考文献欄に挙げるインターネットのデータベースを含む諸資料に拠り、また監督ごとに個別の資料に拠った場合は逐次記載した。なお監督ごとに挙げた参考文献欄には、未見だが必要に応じて今後参照すべき資料名を含んでいる。

監督リスト（生年順）

アラン・ドワン Allan Dwan (Joseph Aloysius Dwan) (1885-1981)

カナダのトロント出身だが、少年期に家族と共にデトロイトへ移り、ノートルダム大学を卒業したドワンを今回のリストに加えるのが果たして適切かどうか、少し迷うところではあるが外国出身であることは間違いない。

映画草創期から脚本家、監督、製作者として活躍、ダグラス・フェアバンクス、メアリー・ピックフォード、グロリア・スワンソン、シャーリー・テンプルなどの作品に携わる。フェアバンクス主演の『ロビン・フッド』*Robin Hood* (1922)、戦後はジョン・ウェインの『硫黄島の砂』*Sands of Iwo Jima* (1949)などが有名だ。スタジオ・システムの体現者で、サイレント期から短篇・長篇含めて、数百もの作品を撮ったという（Thomson, p.315）。

西部劇はフェアバンクス主演の『善良なる悪人』*The Good Bad Man* (1916)に始まり十数本（Hoffmann, p.128）を数えるが、代表作は、ランドルフ・スコットがワイアット・アープを演じる『フロンティア・マーシャル』*Frontier Marshal* (1939)か。20世紀フォックス社は、合併前のフォックス社時代の1934年にすでに同タイトルの作品を製作、またさらに第二次世界大戦後、あの『荒野の決闘』*My Darling Clementaine* (1946)をジョン・フォードに撮らせるが、これら三作はすべてアープの伝記（Stuart N. Lake, *Wyatt Earp, Frontier Marshal*, 1931）を原作とする。つまり本作はリメイク、フォード版は再リメイクになる。また一作目と本作の脚本家は異なるが、本作の単独脚本家であるサム・ヘルマンの名は、フォード版の共同脚本家の一人にも挙がっている。『荒野の決闘』は本作から多くの部分を受け継いでいて、例えば酔ったインディアンの場面などは配役も同じだ（Fagen,p.173）。本作が本邦未公開だったのは、1939年という公

開年と、また戦後に『荒野の決闘』が公開されたためか。

他では、タイトルは少々扇情的だが、『私刑（リンチ）される女』*The Woman They Almost Lynched* (1953）は面白い。南北戦争中、ミズーリとアーカンソーの州境に位置するその名もボーダー・シティの周辺では、南軍の密偵、クァントリル・ゲリラ、北軍部隊らの暗闘が続く中、巧みに中立を守る女市長、死んだ兄の酒場を引き継いだ東部淑女、それにクァントリルの「妻」らが男顔負けの活躍を繰り広げる。酒場での殴り合いも決闘も、リンチの執行を迫るのも皆女たちだ。「色を添える」のは、クァントリル・ゲリラに加わったジェシー・ジェームズやコール・ヤンガーの兄弟たち、そこに東部淑女と南軍の密偵とのロマンスも絡ませ、最後はちゃんと落ちが付く。パロディ感覚横溢の名人芸。またマッカーシズムへの抗議を込めた『逮捕命令』*Silver Lode* (1954）、スタント無しで全てをこなす主演のバーバラ・スタンウィックに讃嘆した先住民のエキストラたちから“Princess Many Victories”を意味する称号を授かった（*Overlook,* p.231）という逸話が知られる『バファロウ平原』*Cattle Queen of Montana*（1954）と『対決の一瞬』*Tennessee's Partner* (1955）などがある。後の二作では若きロナルド・レーガンも出演。

〔参考文献〕

Peter Bogdanovich, *Allan Dwan:the Last Pioneer,* Praeger, 1971.

Frederic Lombardi, *Allan Dwan and the Rise and the Decline of Hollywood Studios,* Jefferson (NC), McFarland, 2013.

マイケル・カーティス **Michael Curtiz (Kertész Mihály/ Manó Kaminer) (1886-1962)**

ハンガリー、ブダペスト（当時はオーストリア・ハンガリー帝国）で、ユダヤ系の両親のもとに生まれる。彼の本名については、各種資料によってまちまちな記載があり、混乱させられる。『ウィキペディア』英語版及びハンガリー語版によると、本来の名は“ManóKaminer”であり、それを1904年にハンガリー式に正式に改めたのが“Kertész Mihály”という（参考に挙げられている資料などの調査を今後の課題としたい）。他の多くの資料で彼の本名としているのはこちらだが、姓が先に置かれるハンガリー式を逆にした形の記載も多い。またこの二種の名を混在させたような記載も見掛ける。

ブダペストで大学、次いで演劇と芸術の王立アカデミーで学んだ後、当初は舞台の俳優や製作者として活動するが、やがて映画界に移り、母国やヨーロッパ各国で監督として活動するようになる。ワーナー・ブラザースに招かれ1926年にアメリカで最初の映画を撮ると、すぐに看板監督となる。1935年から40年頃まで続くエロール・フリンとオリヴィア・デ・ハヴィランド共演による『ロビン・フッドの冒険』*The Adventures of Robin Hood* (1938)のような冒険活劇物は特に人気を呼ぶ。他に代表的な作品として挙げられるのは、ジェームズ・キャグニー主演の『ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ』*Yankee Doodle Dandy* (1942)、ジョーン・クロフォード主演の『ミルドレッド・ピアース』 *Mildred Pierce* (1945)、そして彼の代名詞、アカデミー監督賞受賞、ハンフリー・ボガート主演の『カサブランカ』*Casablanca* (1942)の三本だろう。

西部劇では、『黄金の罠』*Gold Is Where You Find It* (1938)、『無法者の群』*Dodge City* (1939)、『ヴァジニアの血闘』*Virginia City* (1940)、『カンサス騎兵隊』*Santa Fe Trail* (1940)、『誇り高き反逆者』*The Proud Rebel* (1958)、『決断』*The Hangman* (1959)、『コマンチェロ』*The Comancheros* (1961)など十本程度が数えられる。『黄金の罠』から『カンサス騎兵隊』までの四作は基本的にはフリンとハヴィランドの活劇物スタイルの作品(『黄金の罠』ではジョージ・ブレントがフリンの代わり、『ヴァジニアの血闘』ではミリアム・ホプキンスがハヴィランドに代わるが)。あとの三作はワーナー・ブラザースを離れた晩年の作品で、主演はそれぞれアラン・ラッド、ロバート・テイラー、ジョン・ウェインだ。評価の高い『無法者の群』を除くと、それほど悪くないからあまり良くないの間くらいの評価が多い。ただ遺作となった最後の作品は支持する評者もあるがどうだろうか。「ジョン・ウェインはジョン・ウェイン」の世界は、それはそれで悪くはないだろう。しかし「インディアン」たちがただの道具立てのようにヒーローらに次々に狙い撃ちされ、倒れてゆくクライマックスの場面のあまりの無邪気さ、何のこだわりもなさは見ているのが辛い。老境を迎えたフォードが「反省」の時代に入り、サム・ペキンパーも登場という時期の作品としてはどうかなと思われる。「カーティスには西部に対する感性がなかった」(Garfield, p.187)。他の作品についてはともかく、本作に関してはむべなるかなだ。彼が根っこでは「アメリカ人」でなかったということの表出のようにも思われる。

〔参考文献〕
Kati Marton, *Great Escape*, New York, Simon & Schuster, 2006.

フランク・ロイド **Frank Lloyd (Frank William George Lloyd) (1886-1960)**

スコットランド、グラスゴー生まれのロイドはロンドンで舞台俳優や歌手として活動の後、1909年にカナダに移民の後、1913年にはハリウッドに移り、当初は俳優、間もなく監督になる。二度のアカデミー監督賞授与を誇るが、彼はその授与団体「映画芸術科学アカデミー」の創立メンバーの一人でもある。今日なお知られる作品はクラーク・ゲーブルの『 戦艦バウンティ号の叛乱 』*Mutiny on the Bounty* (1935)など。サイレント期を中心に十篇ほどが数えられる長篇西部劇の中で、まずウィリアム・ファーナム主演の『熱火の騎手』*Riders of the Purple Sage* (1918)が挙げられよう。ゼイン・グレイ原作でその後何度もリメイクされる最初の映画化だ。トーキー後では、ジョエル・マクリー主演の『新天地』*Wells Fargo* (1937)とスターリング・ヘイドン主演の『アラモの砦』*The Last Command* (1955)など。前者はサイレント時代からの叙事西部劇の伝統を受け継ぐ作品で、『幌馬車』*The Covered Wagon* (1923)、『アイアン・ホース』*The Iron Horse* (1924)を受け、後の『大平原』*Union Pacific* (1939)、『西部魂』*Western Union* (1941)へと連なる。ただアメリカ草創の大叙事詩の趣きは、特定の会社の事業草創物語へと変容してしまったようでもある。後者はメジャー入りを望み続けたリパブリック社の勝負作品。ほぼ一線を退いていただろうロイドもよく期待に応えたが、この五年後、ジョン・ウェインが膨大な資金を投入して『アラモ』*The Alamo* (1960)を完成させてしまい、影が薄くなった。

ジョージ・アーチェンボード **George Archainbaud (Georges Eugène Louis Marie Archainbaud) (1890-1959)**

フランス、パリ生まれのアーチェンボードがアメリカにやって来たのは1915年、第一世界大戦の戦火を避けたものだろうか。母国でも舞台を中心に活動していたが、アメリカではやがて映画へと活動の場を移し、1917年に監督デビューを果たす。専らルーティン作品の監督として多くの作品を担当し、またテレビ界でもシリーズ物を手掛ける。西部劇としては、ウィリアム・ボイド(「ホパロング・キャシディ」物)、

ジーン・オートリーなどのＢ級シリーズ物も担当しているが、単発の本格的な西部劇は、リチャード・ディックス主演の『硝煙のカンサス』 *The Kansan* (1943)、クレア・トレヴァー主演で西部の歌姫ドラ・ハンドとバット・マスターソンという実在の人物をモデルにした『最後の対決』*The Woman of the Town* (1943)などだ。

フリッツ・ラング **Fritz Lang (Fridrich Christian Anton Lang) (1890-1976)**

オーストリア、ウィーンに生まれる。父は建築家、母はユダヤ系であったが、ラング幼年期にカトリックに改宗し、彼もこの信仰の下に育つ。青年期にヨーロッパ、北アフリカ、アジアなどを旅する。絵画への関心が強く、ミュンヘンとパリで絵画を学ぶ。第一次世界大戦に出征し負傷、右目の視力を失う。療養中に映画の脚本執筆を試みる。ベルリンで映画の脚本家となり、1919年に最初の監督作を手掛ける。大犯罪者『ドクトル・マブゼ』 *Dr.Mabuse* (1922)のシリーズ、表現主義による叙事詩『ニーベルンゲン』*Der Nibelungen* (1924)二部作、そしてSFの古典的名作『メトロポリス』*Metropolis* (1927)と大作を手掛ける。その後は財政難から大作志向は抑えられるが、『Ｍ』*M* (1931)はドイツ時代のフィルムノワールの名作となる。ナチスの台頭後、共同で脚本を手掛けてきた妻のテア・フォン・ハルボウ（ナチスの支持者だった）と離婚、1933年にまずフランスへ、次いで1934年にアメリカに渡る。

ハリウッドではスリラーなど娯楽物を撮る。『Ｍ』を下敷きにした『激怒』*Fury* (1936)が最初の監督作。その後、『暗黒街の弾痕』*You Only Live Once* (1937)、『マン・ハント』*Man Hunt* (1941)、『復讐は俺に任せろ』*The Big Heat* (1953)など、フィルム・ノワール、サスペンス物が多い。五十年代末にドイツに戻り最後のドクトル・マブゼ物などを撮り引退。その後、ジャン・リュク・ゴダールの『軽蔑』 *Le Mépris* (1963)に本人役で出演したことは知られていよう（映画はラング自身の本来の志向とハリウッドのそれとの乖離を暗示する）。

三本あるラングの西部劇の最初はヘンリー・フォンダ主演の『地獄への逆襲』*The Return of Frank James* (1940)だ。ヘンリー・キング監督の『地獄への道』*Jesse James* (1939)で殺されたジェシー・ジェイムズの兄フランクのその後と復讐の物語で、フォンダのフランク役をはじめ主な役を前作から引き継ぐ続編となっている。「作品は騒々しいアクションよりもムードと性格に重きを置く。それが大方の西部劇と違うと

ころだがどういうわけか一部の批評家を当惑させてしまう」(Fagen, p.345)と、通常とは逆にこの続編の方を良いとする見解もあれば、「ラングの監督手腕は重くてユーモアがない、ドイツの暗く気の滅入るメロドラマ向き、[…]屋外のアクション・アドヴェンチャー向きではない」(Garfield,p.268)という人もいる。

次の『西部魂』*Western Union* (1941)はロイドの項でも言及した叙事西部劇(あるいは事業草創物)の歴史に連なる作品。西部に通信網を敷く事業に挑む者たちが、多くの困難や妨害者たちと格闘するという定番のプロットだが、ラングはありきたりな物語に終わらせない。主演はロバート・ヤングだが、西部劇として見れば、主役は明らかにランドルフ・スコットで、ならず者の過去と決別して事業推進のために働くが、妨害工作をするかつての仲間たちを売るような真似はしない。ラストの彼の死の場面は、後のスコット引退作品となるサム・ペキンパー監督の『昼下がりの決闘』*Ride the High Coutry* (1962)のラストのやはり彼の死の場面にオーヴァー・ラップするだろう。

最後の『無頼の谷』*Rancho Notorious* (1952)も、ならず者に婚約者を殺された男の追跡と復讐の物語という定番のプロットながら、やはり単純な物語にはならない。長い追跡の果て、主人公はならず者たちに隠れ家を提供しているという大牧場とその女主人の存在を知る。彼女の恋人のならず者がいる留置場に入るためわざと罪を犯した主人公は男と共に脱獄、牧場に向かう。仇の顔を知らない彼は、婚約者のブローチを身に付けていた女主人から送り主を聞き出そうと彼女に恋を仕掛ける。殺害犯人との対決がクライマックスではなく、主人公と女主人、その恋人の間に生じる友情と愛情の錯綜に焦点を持ってゆくところが並みの西部劇ではない。フラッシュバックや物語の説明描写に挿入歌を使用するなど(BFI, p.292)、技法的にも凝った作品だ。主人公はアーサー・ケネディ、女主人はマレーネ・ディートリッヒだ。

〔参考文献〕

Patrick McGilligan, *Fritz Lang: The Nature of the Beast,* New York, St. Martins Press, 1997.

ウィリアム・ディターレ **William Dieterle (Wilhelm Dieterle) (1893-1972)**

ドイツ、ルートヴィヒスハーフェンに、ユダヤ系の貧しい家に生まれる。ベルリンで舞台監督マックス・ラインハルト(ザルツブルク音楽祭の創設者の一人でもある)の下で学び俳優となる。映画初出演は1913年、監督業にも意欲を示し、1923年に最初の作品を撮る。1930年にドイツ語版製作担当としてワーナー・ブラザースと契約、ハリウッドに進出するが、翌年には最初の監督作品を撮り、その『最後の偵察』*The Last Flight* (1931)が評判をとる。亡命してきたラインハルトと共同で撮った『夏の世の夢』*A Midsummer Night's Dream* (1935)、ポール・ムニ主演の『ゾラの生涯』*The Life of Emile Zola* (1937)などの伝記物、『ノートルダムのせむし男』*The Hunchback of Notre Dame* (1939)などが代表作。ワーナーを離れた後、デヴィッド・O・セルズニックの元で彼の妻になるジェニファー・ジョーンズ出演映画を手掛けるなどした後、五十年代末にドイツに戻った後も映画製作を続け、十数本の作品を残す。

西部劇はアラン・ラッド、アーサー・ケネディ、ジョン・アイアランド共演の『赤い山』*Red Mountain* (1951)がある。クァントリル・ゲリラ物で、理想を抱いた主人公は合流するが、ならず者同然の実態を知って反抗する、というなじみのプロットながら、ラッドとケネディの人物や事件の設定はかなり込み入っている。他にジェニファー・ジョーンズ主演のセルズニックの大作西部劇『白昼の決闘』*Duel in the Sun* (1946)は、監督はキング・ヴィダーとクレジットされているが、実は幾人かの手を経ており、冒頭の印象的な酒場の場面はディターレによるものという。

ダグラス・サーク **Douglas Sirk (Claus/Hans ? Detref Sierck) (1897/1900?-1987)**

ドイツ、ハンブルクでデンマーク人の両親の下に生まれる。子供時代に家族でデンマークに帰った時期もあったが、ハンブルクに戻る。ミュンヘン、イェナ、ハンブルクの大学で初めは法律、その後哲学と美術史を学ぶ。ハンブルクで学んだ美術史家エルヴィン・パノフスキーの影響が大きいという。舞台の仕事に入り、各地の劇団で演出や指導的役割を務める(このころハンスの名を使うようになったという)。1934年、UFA社のオファーを受け、映画に進出。1937年、妻がユダヤ系であったためフランス次いでオランダに亡命。ワーナー・ブラザースと契約し、アメリカに渡るが、キャンセルされる。独立プロで亡命ドイツ人グループと"*Madman of Hitler*"(1943)

を撮り、その後は主にB級作品を撮り続ける。『心のともしび』*Magnificent Obsession* (1954)が彼の地位を一挙に引き上げる(主演のジェーン・ワイマンがアカデミー賞ノミネート、共演のロック・ハドソンの出世作)。他に『風と共に散る』*Written on the Wind* (1956)、『悲しみは空の彼方に』*Imitation of Life* (1959)など。だが、ただのメロドラマではない、社会への批判的な視点での再評価がなされている。

西部劇は二つ。"*Take Me to Town*" (1953)は、アン・シェリダン扮する酒場の女歌手が、スターリング・ハイドンの説教師とその三人の息子たちの良き妻・良き母となろうと奮闘する姿を描く開拓時代のホームドラマ。彼女は教会建築の資金集めに歌芝居を催す。『アパッチの怒り』*Taza, Son of Cochise* (1954)は、父コチーズの遺言を守り白人との融和を望む兄と好戦的な弟の対立に恋のさや当ても絡む物語。主人公が弟より騎兵隊長との信頼関係を選ぶという結末は、映画における先住民の扱いについて熟慮が必要と考えられるようになっていた時期としては異色。またアパッチの主人公を演じたロック・ハドソン自身、「長いかつらと黒塗りの"Joe College" (平均的な大学生)みたいで滑稽だった」(Fagen, p.422)と言うように、「50年代の一連のインディアン映画の中で多分最も奇妙な」(*Overlook*, p.235)作品というのが一般的な評価だろう。他方、フランスなどでは、「名誉ある西部劇」(Tulard, p.860)と評する向きもある。

サークの本来のファースト・ネームと生年だが、『ブリタニカ』は、上記のように元の"Claus"からに"Hans"に変えたと考えている。また生年は1900年と記すが、インターネットの各種データベースなどでは、"Hans"説、1897年説を取る例が多い。今後の課題としたい。

ルーベン・マムーリアン **Rouben Mamoulian (1897-1987)**

グルジア(ジョージア)のトビリシ、当時はロシア帝国グルジアのティフリスに、アルメニア系の家に生まれる。モスクワ大学で刑法を学び、その後モスクワ芸術座で訓練を受ける。1920年にイギリスに亡命、ロンドン大学で演劇を学び、演出を手掛ける。1923年にアメリカに渡り、オペラなどの演出を続けた後、シアター・ギルドで指導と演出を手掛ける。舞台『ポーギー』*Porgy* (1927)の演出で名を挙げ、その後ガーシュインのオペラ版『ポーギーとベス』*Porgy and Bess* (1935)、ミュージカル『オクラホ

マ!』*Oklahoma!* (1943)などの演出を手掛ける。並行して映画監督にも進出、第一作『喝采』*Applause* (1929)は自在にカメラを動かし、また歌や踊りの場面も取り入れるなど、新生面を切り開いたと言われる最初期のトーキー作品。他にダシール・ハメット原案、ゲーリー・クーパー主演のギャング映画『市街』 *City Streets* (1931)やホラー作品『ジキル博士とハイド氏』 *Dr.Jekyll and Mr.Hyde* (1937)などが名高い。

準西部劇作品が二つ。『歌へ陽気に』*The Gay Desperado* (1936)は、歌手と歌好きのメキシコ人盗賊の登場する「プロットより歌が多い」(Garfield, p.171)作品。『怪傑ゾロ』*The Mark of Zorro* (1940)は「全冒険活劇物中で最も優美なものの一つで数あるゾロ映画のベスト」(*Overlook*, p.108)。マムーリアンの本領は、「(主役の)タイロン・パワーとベイジル・ラスボーンは、聞こえないスコアに乗せて踊るよう」(Thompson, p.664)という対決場面に発揮される。

ルドルフ・マテ **Rudolph Maté (Rudolf Matheh / Mayer ?) (1898-1964)**

ポーランドのクラクフ(当時はオーストリア・ハンガリー帝国領)に生まれる。ブダペストの大学で学び、1919年にアレクサンダー・コルダのカメラマン助手となって以降、まずベルリンとウィーンで、1920年代末にはパリに移りカメラマンとして活動する。パリでは、カール・ドライエルの『裁かるるジャンヌ』*La Passion de Jeanne d'Arc* (1928)、『吸血鬼』 *Vampyr* (1932)をはじめ、フリッツ・ラング、ルネ・クレールなどの作品でもカメラマンを務める。1935年にアメリカに渡り、引き続きカメラマンとしてアカデミー撮影賞にノミネートされたヒッチコック監督の『海外特派員』*Foreign Correspondent* (1940)やリタ・ヘイワースのイメージを決定付けたチャールズ・ヴィダー監督の『ギルダ』*Gilda* (1946)などを撮る。1947年に監督に転じ、『都会の牙』*D.O.A* (1949)、『武装市街』*Union Station* (1950)などのサスペンス作品で知られる。

西部劇はすべて(撮影監督としてではなく)監督作品。アラン・ラッド演じる主人公が行方不明の牧場主の息子に成りすます『烙印』*Branded* (1950)、グレン・フォード、バーバラ・スタンウィックらが共演、一人の女と三人の男という構図が、同じグレン・フォード主演のデルマー・デイビス監督作品『去り行く男』*Jubal* (1956)を思わせる『欲望の谷』*The Violent Men* (1954)の他、『ミシシッピーの賭博師』*The Mississippi Gambler* (1953)、『レッド・リバー』*The Siege at Red River* (1954)、『遥かなる地平線』

The Far Horizons (1955)、『顔役時代』*The Rawhide Years* (1955)、『三人のあらくれ者』*Three Violent People* (1957)などがある。

彼の本姓だが、『ブリタニカ』や従来の資料の多くが“Matheh”と記す一方、各種のインターネット資料には“Mayer”とする例が多い。ルドルフ・マイヤーのドイツ・ユダヤ的な響きは自然ではある。一般的に渡米後に改名する場合が多いが、その名の響きからも推測されるようにフランス時代の変更のようだ(先のドライエル作品にも“Maté”の名でクレジットされている)。ただ通常、改名後の名は語源的に元の名と関係があるか、発音に類似性のある例が多いように思われる。頭文字と最初の音節は確かに同じだが、“Mayer”から“Maté”への変更には多少違和感を覚える。従来の“Matheh”説が気になる。

チャールズ・ヴィダー **Charles Vidor (Vidor Káro1y) (1900-1959)**

ハンガリー、ブダペスト生まれで、マイケル・カーティスとは同郷。ベルリンでUFA社でアシスタントとして働いた後、1920年代末にアメリカにやって来た当初は歌手として活動する。自主制作でアンブローズ・ビアスの作品に基づく短編「橋」*The Bridge* (1929)を撮り、その後ハリウッドで脚本を書くようになる。ボリス・カーロフ主演の『成吉斯汗の仮面』*The Mask of Hu Manchu* (1932)で監督に指名されるが、すぐに交代させられる。以後、B級作品の監督を続け、30年代末にコロンビア映画と契約してA級に移行。代表作は、リタ・ヘイワースのグラマラスな魅力を映し出した『カバー・ガール』*Cover Girl* (1944)と『ギルダ』*Gilda* (1946)。しかし1946年、契約を巡ってコロンビア映画のドン、ハリー・コーンと対立、結局裁判に負けて以後はフリーとなるが不遇の晩年だった。

西部劇は、リチャード・ディックス主演の『建設の嵐』*The Arizonian* (1935)と、コロンビア映画初のカラー作品『無頼漢』*The Desperadoes* (1943)の二つ。後者はよくある更生するならず者のプロットだが、売り出し中のグレン・フォード演じる若いならず者を、ベテラン俳優ランドルフ・スコットの保安官が後見するような雰囲気がフィットしていて好感が持てる。ヴィダーが油に乗ってきた頃の作品だ。

レスリー・フェントン **Leslie Fenton (1902-1978)**

イギリス、リヴァプール生まれのフェントンは少年時代にアメリカにやって来た。当初は俳優としてジェームズ・キャグニー主演の『民衆の敵』*The Public Enemy* (1931)などに出演し、後に監督などとして活躍する。西部劇としては、南北戦争における密偵もの、ウォーレス・ビアリー主演の『ダコタから来た男』*The Man from Dakota* (1940)、列車強盗団を追うクールな主人公をアラン・ラッドが演じる『ネブラスカ魂』*Whispering Smith* (1949)はサイレント時代から三度目の映画化作品、『テキサス決死隊』*Streets of Laredo* (1949)はキング・ヴィダー監督の『テキサス決死隊』*The Texas Rangers* (1936)のリメイク、そしてやはり南北戦争の密偵もの、グレン・フォード主演の『黄金の大西部』*The Redhead and the Cowboy* (1951)がある。

ウィリアム・ワイラー **William Wyler (Wilhelm Weiller) (1902-1981)**

フランス、アルザスのミュルーズ(当時はドイツ帝国領ミュルハウゼン)に、スイス出身の商人の父とドイツ人の母の下に生まれる。スイスのローザンヌで商業を、パリでヴァイオリンを学ぶが、長続きしなかったようだ。母はいとこでユニヴァーサル映画の創設者カール・レムリに息子を頼む。1921年にアメリカに渡り、当初はニュー・ヨークで事務仕事に使われるが、23年頃にはハリウッドに移る。監督助手などを務めた後、25年には監督となり、数十本の短篇西部劇を撮る。28年頃には昇格し、ロマンス物の長編を任されるようになる(彼の本名や家族等について具体的な記述をする資料は少ない。ここでは下記インターネットサイト:*Geni*に拠った)。

しかし1935年にユニヴァーサル映画を離れ(レムリも間もなく辞める)、37年にサミュエル・ゴールドウィンの製作会社と契約する。以降、『孔雀婦人』*Dodsworth* (1935)、『嵐が丘』*Wuthering Heights* (1939)、『偽りの花園』*The Little Foxes* (1941)、『我等の生涯の最良の年』*The Best Years of Our Lives* (1946)などを、また他社でも、ナチスに対する闘いを鼓舞する意図で製作された『ミニヴァー夫人』*Mrs. Miniver* (1942)、有名な『ローマの休日』*Roman Holiday* (1953)に『ベン・ハー』*Ben-Hur* (1959)と、次々に名作を生み出す。

西部劇は、初期の多くの短編を除けば、『砂漠の生霊』*Hell's Heroes* (1930)、『西部の男』*The Westerner* (1940)、『友情ある説得』*Friendly Persuasion* (1956)、『大いな

る西部』*The Big Country* (1958)の四作が数えられる。『砂漠の生霊』は、ピーター・B・カインの『三人の名付け親』 *Three Godfathers* (1913)原作の何度も映画化された作品中(フォード作品が有名)で最初のトーキー版。ゲーリー・クーパーとウォルター・ブレナン共演の『西部の男』は実在のロイ・ビーン「判事」の物語を、放牧者と農民の対立という西部開拓史上のトピックに絡めて、元南軍兵士ビーンの姿に滅びゆく者の哀切を共感を込めて描いた名品。同じくゲーリー・クーパー主演の『友情ある説得』はワイラーの自主製作で、平和・非暴力を信条とするクエーカー教徒の家族の南北戦争時の姿を描く。「友情ある」の形容は教徒たちの本来の呼称「フレンド会」Religious Society of Friendsに由来するのだろう。配給会社は、非米活動委員会での証言を拒んだ脚本家マイケル・ウィルソンの名をクレジットから消した(Fagen, p.171)。非暴力主義における勇気とは、というテーマを扱った作品への大いなる皮肉だ。

最後の『大いなる西部』は、主演グレゴリー・ペック、共演にジーン・シモンズ、チャールトン・ヘストン、バール・アイヴス(アカデミー助演男優賞)などを擁した大作。テキサスの大牧場主の二つの家の長く続く確執を、東部からやって来た海軍士官出身の主人公が和解に至らせる物語。低予算でもっとコンパクトな作品にできたかもしれない題材を壮大な叙事詩のスケールに仕立て上げるのも巨匠の技か。邦題は如何にも西部劇のようだが、原題はテキサスの広大さを自慢する登場人物たちの決まり文句に由来し、海を相手にしてきた主人公から見れば「井の中の蛙」(随分広い井戸だが)にしか思えないという皮肉が込められたもの。

〔参考文献〕

Gabriel Miller, *The Life and Films of Hollywood's Most Celebrated Director,* Lexington, University Press of Kentucky, 2013.

"William Wyler", Geni: My Heritage Company, www.geni.com, Geni.com.(2018年8月31日閲覧)

ジョン・ファーロウ **John Farrow (John/Jack ? Villiers Farrow) (1904-1963)**

オーストラリア、シドニーに仕立て屋の両親の下に生まれる。地元で学業を終えると、アメリカ船に乗船して太平洋の各地を巡る。1923年にはサンフランシスコで大学進学を志すもすぐに断念。南海上の航海でドキュメンタリー映画監督ジョン・フラ

ハティと出会ったことで、映画に目覚め、再度アメリカへ向かう。27年頃にはハリウッドで脚本の仕事を始め、一時イギリスで仕事をした後、33年に再びハリウッドに戻るが、ビザの偽造により逮捕され、5年の保護観察処分を受ける。36年、ターザン映画の監督指名をキャンセルされるが、ジェニー役の女優、モーリン・オサリヴァンと結婚することになる。最初の妻と離婚後、(アイルランド系の新妻に合わせて)カトリックに改宗する。たくさんの子供の一人に女優ミア・ファーロウがいる。その後、主にB級作品の監督を続けながら、第二次世界大戦時にはカナダ海軍の志願兵となり活躍し、罹病のため名誉の除隊となる(以上は下記『オーストラリア伝記事典』に拠った。洗礼名は"Jack"だったとも記されているが、いつの時点で変わったのかは不明。『ブリタニカ』をはじめとする資料に「イギリスの名門パブリック・スクールで学んだ」などとあるが、相当かけ離れている。「ハリウッド伝説」の一つか)。

その後、アカデミー監督賞、作品賞などにノミネートされた『ウェーク島攻防戦』*Wake Island* (1942)がヒット作となる。他に冒険物の『最後の地獄船』*Two Years before the Mast* (1946)やサスペンス物の『大時計』*The Big Clock* (1948)などが代表作に挙げられるが、ジョン・ウェイン主演の西部劇『ホンドー』*Hondo* (1953)こそ代表作だろう。主人公ホンドーの複雑な心理の描写や勇気を重んじる誇り高きアパッチの族長ヴィトロの姿、また荒野の風景描写などは、確かに撮影時に訪れたというフォードのタッチを感じさせる(*Overlook*, p.224)。他には、レイ・ミランド、バーバラ・スタンウィック共演の『カリフォルニア』*California* (1947)や同じくミランド主演の『銅の谷』*Copper Canyon* (1950)、そしてロバート・テイラー、エヴァ・ガードナーにハワード・キール、アンソニー・クインが絡む『荒原の疾走』*Ride, Vaquero!* (1953)がある。

〔参考文献〕

"John Farrow", Australian Dictionnary of Biography, adb.anu.edu.au, National Centre of Biography at Australian National University, www.anu.edu.au. (2018年8月30日閲覧)

エドガー・G・ウルマー **Edgar G.(Georg)Ulmer (1904-1972)**

チェコのモラヴィア地方、オロモウツ(当時はオーストリア・ハンガリー帝国領)に生まれる。ウィーンで建築を学ぶ傍ら、舞台装飾の仕事をする。ディターレの項でも

その名の出た舞台監督マックス・ラインハルトに雇われ、彼に付いて1920年代初頭にニュー・ヨークに行く。その後、ドイツに行き、今度はF・W・ムルナウの元で『最後の人』*Der letzte Mann* (1924)、『ファウスト』*Faust* (1926)で助手を務める。1927年、ハリウッドに招かれたムルナウに付いて行き、『サンライズ』*Sunrise* (1927)、『都会の女』*City Girl* (1930)、『タブウ』 *Tabu* (1931)の装飾を担当する。この間、ベルリンでロバート(ロベルト)・シオドマクと共同で初映画作品『日曜日の人々』*Menschen am Sonnentag* (1930)を撮る(ピーター・ボグダノヴィッチのインタビューによると、この頃ハリウッドで短編西部劇を幾つか撮ったともいう)。

1933年に独立系会社の低予算ホラー映画 "*Damaged Lives*" (1933)を、次いでユニヴァーサル映画で『黒猫』*Black Cat* (1934)を撮る。42年には"Poverty Row"スタジオと総称される独立系のマイナー製作会社の一つPRC社で活動を始め、『青髭』*Bluebeard* (1944)のようなスリラー、『恐怖のまわり道』 *Detour* (1945)のようなフィルム・ノワール作品を数多く手掛ける。その後、メジャー系のユナイテッド・アーティストでフィルム・ノワール作品『奇妙な女』 *The Strange Woman* (1946)を撮る一方、『カーネギー・ホール』*Carnegie Hall* (1947)のような「ハイブロウ」な音楽映画、SFホラーの『惑星Xから来た男』 *The Man from Planet X* (1951)もある。西部劇にはジョン・ワーナーの変名で撮った50分の短編 "*Thunder over Texas*" (1934)と『裸の夜明け』 *The Naked Dawn* (1955)、アーサー・ケネディがメキシコ人の盗賊を演じる犯罪西部劇がある。

〔参考文献〕

Peter Bogdanovich, *Who the Devil Made It: Coversations with Legendary Film Directors,* New York, Ballantine Books, 1997.

Bernd Herzogenrath, *Edgar G. Ulmer. Essays on the King of the B's,* Jefferson (NC), 2009.

Bernd Herzogenrath, *The Films of Edgar G. Ulmer,* Lanham (MD), Scarecrow Press, 2009.

Noah Isenberg, Edgar G. Ulmer : *A Filmmaker at the Margins,* Berkley, University of California Press, 2014.

ジャック・ターナー **Jacques Tourneur (1904-1977)**

著名な映画監督のモリス・ターナーと女優の母との間に、フランスのパリに生まれた。所属映画会社の都合でアメリカに行った父の後を追い、1914年、母子共に大西洋を渡る。当初はニュー・ヨーク、やがてハリウッドに移る。後の西部劇スター、ジョエル・マクリーと友人になるのはハリウッド高校でのことだ。父はやがて、トマス・インス、マーク・セネットらと製作会社(Associated Producers Inc.)を設立。その第一作として『モヒカン族の最後』*The Last of Mohicans* (1920)を撮ることになる。つまり父モリスも外国出身の西部劇監督に数えられるわけだが、実際はロケの開始後すぐに体調を崩し、代役のクラレンス・ブラウンによって多くが撮られたという(Fujiwara, p.17)。26年にMGM社と契約で揉めた父はヨーロッパに帰るが、ジャックは留まり、そのMGM社と俳優の契約をする。だが、結局父の招きに応じて28年にヨーロッパに戻ると、父の助手などを務めた後、自身監督を手掛けるようになる。34年にハリウッドに戻り、MGM社と今度は監督として契約する。ところで彼らの姓“Tourneur”だが、クリス・フジワラによると、父モリスの元の姓は“Thomas”だったという。それをモリスはイギリス的なのを嫌って改姓したとのこと。それは彼がまだ演劇界で活躍を始めた頃のことだが、後に映画界に入ることになるのは運命的だ。フランス語の“tourneur”(旋盤工)は“tourner”(回す)という動詞から来ているが、この動詞は「(映画を)撮る」という意味にも使われるようになるからだ。少し出来すぎた話ではあるがどうだろう(Fujiwara, p.13)。

ジャック・ターナーの今日なお続く名声は、RKO映画のヴァル・リュートン製作の下で撮った古典的名作『キャット・ピープル』*Cat People* (1942)をはじめとする三作のホラー映画やフィルム・ノワールの古典『過去を逃れて』*Out of the Past* (1947)などによるが、実は西部劇も重要なジャンルだ。

最初の西部劇作品『インディアン渓谷』*Canyon Passage* (1946)について、マーティン・スコセッシは「それが実際の開拓民たちの町だと感じさせる」作品だと称賛している(Foreword to Fujiwara, p.xii)。美しいカラー映像に、ターナーお得意の「暗示」の効果を活かした締まった演出。またスタンダードの名曲「スターダスト」などで知られるホーギー・カーマイケルも鍵になる役柄で出演し、魅力的な「オール・バターミルク・スカイ」などを歌っている。

次作は、自ら志願して監督した『星を持つ男』*Stars in My Crown* (1950)だ。友人ジョエル・マクリー主演の本作は、南北戦争後に南部の田舎町に赴任して来た説教師の半生を描く作品で、熱心に布教に取り組む彼とその家族、町の人々との交流、様々な出来事や事件が織りなされてゆき、クライマックスでは、町の古老である黒人農夫のため、クー・クラックス・クランに一人敢然と立ち向かう主人公の姿が描かれる。舞台設定とあらすじだけ見ると、西部劇ではなさそうに思われるかもしれないが、酒場の酔っ払い共に二丁拳銃を向けていきなり説教を始める主人公の姿を描く冒頭の場面は完全な西部劇世界だ。ただルーティン作扱いの本作を進んで引き受けたことで、ターナーの待遇には影が差す。以降次第に、二番手監督、ルーティン担当扱いになるのだ。

続く『草原の追跡』*Way of a Gaucho* (1952)は、ペロン政権の対米政策によってアルゼンチンで製作することとなった異色の「西部劇」だが、当初予定されていた監督が家族の病気を理由に降りたのを受けてターナーにお鉢が回ってきた作品だ。広大な草原(パンパ)に牛を追うカウボーイ(ガウチョ)や「先住民との闘い」は合衆国だけのものではない、19世紀アルゼンチンの歴史でもあったのだ。そもそもガウチョこそはカウボーイの祖先と言える。古くからの生き方を守ろうとする一人のガウチョを、「進歩と発展」を盾に「新しい時代」(政府と軍隊に象徴される)が追い立てる。誇り高きガウチョを好演するローリー・カルホーン、広大なパンパや雪のアンデスの風景描写など魅力にあふれている。妻と生まれてくる子供のために、ついに抵抗を断念する主人公の姿は、ガウチョが(先住民たちと同様)やがて滅びゆく存在であることを暗示する。やがて60年代に入るころから一つの潮流となる「黄昏の西部」というテーマを先取りしているようでもあり、その点でも興味深い作品だ。

次に再びマクリー主演の『ストレンジャー・オン・ホースバック』*Stranger on Horseback* (1955)、『法律なき町』*Wichita* (1955)が続く。ルーティン西部劇の括りに入る両作だが、ワイアット・アープの前史を扱った後者が、(評価する向きも多いが)マクリーの持ち味である朴訥さがかえってほのぼのとした作品にしてしまった感があって物足りないのに比べ、前者はわずか66分の作品ながら、タイトな意表を突く結末の脚本を見事な演出でまとめあげた知られざる傑作と言える。ロバート・ノットがその著作で嘆くように、今日容易には見られない作品であるのが残念だ(Nott, p.95)。最後

の西部劇となったのが『硝煙』*Great Day in the Morning* (1956)である。南北戦争直前のコロラドの鉱山町で各陣営に付く住民間の葛藤を背景に、故有って殺害した男の息子の庇護者となった主人公の物語だ。本作はレオーネのお気に入りの一つで、南北戦争を背景とする点などに影響が考えられる。

〔参考文献〕

Chris Fujiwara, *Jacques Tourneur. Cinema of Nightfall,* Jefferson (NC), McFarland, 1998.

Michael Henry Wilson, *Jacques Tourneur ou la magie de la suggestion,* Paris, Centre Pompidou, 2003.

終わりに

今回は紙幅の都合で、ここで終わるが、今後も外国人西部劇監督の捜索は続けてゆく。いわゆるB級シリーズ物やサイレント期の短編作品などの製作者については手が回らなかった。資料などの関係で難しい面もあろうが、今後はそういった分野での業績も追及して行くことにしたい。

参考文献

André Bazin, «Evolution du Western», *Qu'est-ce que le Cinéma,* 14e édition, Editions du Cerf, Paris, 2002.

Edward Buscombe (ed.), *The BFI Companion to the Western*, London, Andre Deutsch / BFI Publishing, 1988.

Herb Fagen, *The Encyclopedia of Westerns*, New York, Checkmark Books, 2003.

Chris Fujiwara, *Jacques Touneur. Cinema of Nightfall,* Jefferson (NC), McFarland, 1998.

Brian Garfield, *Western Films: A Complete Guide,* New York, Da Capo Press, 1982.

Phil Hardy (ed.), *The Overlook Film Encyclopedia: The Western,* 2nd edition, Woodstock (NY), Overlook Press, 1991.

Jim Hitt, *The American West from Fiction (1823-1976) into Film (1909-1986),* Jefferson

(NC), McFarland, 1990.

Henryk Hoffmann, *"A" Western Filmmakers: A Biographical Dictionary of Writers, Directors, Cinematographers, Composers, Actors and Actresses,* Jefferson (NC), McFarland, 2000.

Robert Nott, *Last of the Cowboy Heroes :the Westerns of Randolph Scott, Joel McCrea, and Audie Murphy,* Jefferson (NC), McFarland, 2000.

David Thomson, *The New Biographical Dictionary of Film,* 6th edition, New York, Knopf, 2014.

Jean Tulard, *Dictionnaire du cinema: les réalisateurs,* Paris, Laffont, 2003.

インターネット文献（アクセス：2018年8月）

"AFI Catalog of Feature Films", AFI: American Film Institute, www.afi.com, American Film Institute.

Allcinema: Movie & DVD Database, www.allcinema.net, Stingrey.

Encyclopedia Britannica, www.britannica.com, Encyclopædia Britannica, Inc.

IMDb: Internet Movie Database, www.imdb.com, IMDb.com, Inc.

Kinenote, www.kinenote.com, キネマ旬報社.

"TCM Movie Database", TCM: Turner Classic Movies, www.tcm.com, Turner Classic Movies.